公益の風 #5

東北公益文科大学大学院運営委員
教授　広瀬雄二

情報技術に吹く「オープン」という風

「子どもは風の子元気な子、みんな仲良く公園に集まってなんとも喜ばしい光景だ……と思ったらゲームとは嘆かわしい」などという話題が出はじめたのはもうふた昔も前になるでしょうか。「ファミコン」から始まる家庭用ゲーム機の潮流は絶え間なく発展を繰り返し、やがてゲームの舞台はお茶の間のテレビから一人ひとりの手の中の機器に移り、今はスマートフォンになりました。

ここ数年、公園に子どもたちが集まって追いかけっこをする脇で、付き添いのはずの大人が大勢ベンチに群がってゲームをしている光景が見られるようになりました。「ポケモンGO」です。子どもそっちのけで遊ぶことの是非はさておき、ポケモンGOの人気を支える理由の一つに、公益的な考えがあることをご存知でしょうか。

ポケモンGOは、実際にその土地に出向いてその場所にいるモンスターを捕まえて楽しむゲームで、多くの人が様々な場所に足を運ぶきっかけとなっています。この性質を利用し、東日本大震災で訪問客減少に悩む被災地に、遊び手が喜ぶ希少価値の高いアイテムを設置し、景気回復の一助となったことはご存じの方もいるでしょう。そんなポケモンGOは数年前に、使用する地図をオープンストリートマップに変えました。

オープンストリートマップ（OSM）とは、世界中の有志が集まって作られた誰もが自由に使える地図のことです。書籍や芸術がそうであるように、地図も著作権によって保護されています。それらを無断でコピーして頒布することは認められません。しかし我々の生活を支えるものを自由に使えないことを不便に思った有志が集まり、著作権に縛られない地図を作り始め、今ではそれに賛同した世界中の「市民の力」によって主要な道路や公共施設が網羅されるほどになっています。本来の地図としての充実度を増すために努力する人もいれば、ゲームで楽しめる場所を増やそうと頑張る人もいます。いずれにせよ、地図の充実は大なり小なり人々の交流活性化につながります。OSMはゲームのためだけのものではありませんが、一つのゲームが叡智の結集を支える一翼を担っています。

OSMは一つの例にすぎません。我々が情報を扱う上で必要なソフトウェア（アプリ）や、分析を行うのに役立つであろうデータを誰にでも自由に使える形で提供しようという理念のもと作成されているものをそれぞれ「オープンソースソフトウェア」、「オープンデータ」といい、インターネットを通じて多数公開されています。

我々の情報は誰のものでしょう。当然のことですが、自分の情報は自分のもので、自分の自由になるべきものです。自分の情報を管理するために、お金を払い続けないといけないことになっているとしたら、そこには本当の意味の自由はありません。そうした自由を守るために多くの人の奉仕によって支えられているオープンソースソフトウェア、オープンデータの存在にぜひ注意を向けてみてください。知恵の結集を独占することなく一人でも多くの人と共有する、情報技術にはそうした理念に基づくものが溢れているのです。

ジュニアドクター鳥海塾でもオープンソースソフトウェアを活用しています

「敬天愛人」2021年11月号Vol.152掲載（荘内日報 社発行）